
白の思い出

スターリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の思い出

【Nコード】

N4696Q

【作者名】

スターリン

【あらすじ】

愛する人との大切な時間。それは誰もが望む幸せな時間。無口で人間関係を嫌う少年はささいな出来事をきっかけに一人の少女と出会った。たおとなく清楚な彼女もまた、人間関係を苦手とする女性だった。

少年は序所に彼女に惹かれそして思いを告げる。そして2人の物語は始まる。2人は大切な時間の中で幸せな記憶を1ページずつゆっくりと刻み始める。そんな中クリスマススイブ、12月24日スキーにやってきた少年と少女は予想だにしない大事故に巻き込まれる・

2人の前でおきた高梨高原スキー場での壮絶な記憶の1ページ。
そして二人の幸せ（思い出）は？

1 プロローグ（桐沼健太（前書き））

皆様初めまして、ハースターリンと申します。

プロローグを割りと短く作ってしまい本文と繋げて構成する事をお許し下さい。^^;

文中誤字や脱字、その他もろもろ間違いがあるかと思いますがご勘弁下さいw

あえて突っ込まないであげて下さいw

1 プロローグ 桐沼健太

★プロローグ★

2003年12月25日AM8:15 高梨高原スキー場

いったいあれからどのくらいの時間がたったんだろう・・・
冷たい少女の手を握り締めながら少年は思う。

「・・・も・・・く・・・な。」

周りが全て白く静かな世界の中で少女は低く細い声で口を動かす。
少年は意識が序所に遠のいていく中で少女の言葉を拾い集めようとする。

そして少年も口を動かそうとするが思うように声がでない。

声はかすれ、手足にはすでに感覚はなく、周りの白い景色の中で少年の頭の中も白く覆いつくされようとしている。

少年は動かない手先で無造作に僅かな雪を掴み必死に白い形を作り始める。

やがて遠のく意識の中でぼんやりと思い出す・・・二人の大切な記憶（幸せ）を・・・

1、★桐沼健太★

2000年7月12日

眩しい朝日が部屋全体に行き届く頃、小さなテーブルの上では激しく電子音が鳴り響く。

頭に直接ながれこんでくる大音量の電子音の中で起きないはずがない。

少年は重い体をゆっくり起こし時計をみる。6時30分。
こんなに早く起きるのは高校の入学式以来だったかな・・・

おぼつかない足取りで階段を下りる。

「昨日は散々だったな……。」

部屋中には散らかっているお菓子や缶ビールの飲みかけなど、目を背けたくなるような光景が広がっている。

「つたく、片付ける方の身にもなれっつーの。」

健太は渋々ちらばっているゴミを片付け始める。

昨晚、桐沼家には叔父の桐沼正志がきていた。持っていた袋からは大量に詰め込まれた酒が見えた。

会社の同僚との飲み会で遅くなり家を閉め出されたく、行き場がなくなり俺の家に来たようだ。

叔父は仕事や家庭内での日常のストレスをバシバシと容赦なく俺にぶつけてくる。

そして好きなだけ愚痴をもらし酒を飲み最後にはでかい酩酊いひやうをかきながら眠っている所を奥さんが引きずって帰る。

もちろん今回が初めてではない。毎回どちらもいい迷惑だ。

桐沼家では両親が3年前に交通事故で他界して以来、古くも割と大きいこの家では俺が一人で住んでいる。

心配した叔父と一緒に暮らさないかと何度も話をもちかけてきたが、俺はそのたびに断っている。

何しろあのだらしない叔父だ。毎日のように騒がれては気の休まる時間がない。

7年前に病気で他界した祖父が大地主だった為、遺産の残りもあり今の生活には困っていない。

健太はようやく片付いた居間を見わたす。時計の針は7時40分になっていた。

「もうこんな時間かよ！あのクソオヤジ、今度きたらブン殴ってやる！」

健太はソファの上に置いてあった学生鞆を取り大急ぎで家をする。

どんなに急いで学校についたところで遅刻にはかわりなかった。

教室に入ると既にHRが終わり、1時限めの体育の為に男子生徒がジャージに着替え始めているところだ。

「桂木に見つかる色々うるさいからな・・・」

さりげなく溶け込もうとした健太の後ろから

「毎回この時間に登校とはいい身分だなあ！桐沼。」

振り向くと腕を組んで立っている桂木がいた。

まるでマンガのようにベタなタイミングだ。

「・・・今日は本当に朝早く起きたんすけどね。部屋の掃除をしてたらいつのまにかこんな時間に・・・」

「聞き飽きたわ！毎回たいした事もない嘘つきおって。職員室へ来い！」

そう言っただけの言葉に割って入ってきた桂木は授業の始まりのチャイムと共に長い廊下を歩いて行った。

「あいつとは話し合うだけ無駄なんだよな・・・」

健太はボソッと呟く。

そこへ1人の男子生徒がものすごい勢いで走ってきた。

「おう桐沼。また桂木の奴に捕まったのかあ？毎日退屈しないねえ。」

笑いながら健太の肩を叩く。

「うるせえな・・・何しにきたんだよ。小笠原。」

健太は肩に乗っていた小笠原の手を振りほどく。

「そんな恐い顔するなって。別にお前をからかいに来た訳じゃねーんだ。」

「運動靴忘れて取りにきたら桂木に絡まれてるお前を見たんでな。」

「どうせ今日も朝から職員室行きなんだろう？さっさとこいよー。授業終わっちゃうぞー。」

そう言い残して小笠原は長い廊下を走っていった。

小笠原は積極的に誰にでも明るく接する性格で皆からは割と評判がいい。

だがその性格のせいもあり空回りする事も少なくはない。まあ・・・

基本的にはいい奴なんだろう。

しかし健太にしてみればあまり心地よいものでもない。構わないでほしい・・・放っておいてほしい・・・

それが健太の本音だった。

叔父といい桂木といい小笠原といい健太の周りには面倒臭い人間が多い。

だから彼は人との関わり合いが苦手であり、好きでもない。

小笠原とは反対の性格なのだ。

1時限めは出れそうにもないな、そう思いながら健太もまた長い廊下をゆっくりと歩いて行く。

1 プロローグ 桐沼健太（後書き）

閲覧ありがとうございます^^

この作品はマイペースに進めていこうと思っているので続編を期待してくれる方は・・・いないかw

とりあえずこっそりUPさせて頂きますw

目標としては暇つぶし程度にはなれるような内容にはしたいと思っていますw

最後になりますがこのページを見て下さった皆様、内容までも読んで下さった皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございますました^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4696q/>

白の思い出

2011年10月8日13時45分発行